

《ta・KK・ei 2021》 に寄せて

昨年、〈奇数連結〉を再始動させた。それは世界中がこの感染症の内側で生きることとなってしまったことと決して無縁ではなかった。

3枚組の《ta・KK・ei 2020》は20年以上の時を経て再び「磔刑」をモデルに描くこととなった。1998年に〈奇数連結〉の典型として取材したグリュネヴァルトの《磔刑図》は、当時のペスト蔓延の中でイーゼンハイムの修道院内施術院の礼拝堂の祭壇画として多くの信者、感染者が祈りとともにイエスの受苦に自らの境遇を重ね合わせたことだろうことを改めて知ることとなった。

また留学中の86年、シエナで目にしていたアンブロジーヨ・ロレンツェッティのあまりにも寓意的な壁画が遠い記憶から思い起こされ、そのタイトルが《善政、悪政の寓意》であったこと、そして彼も1348年にペストで没したこと、加えてF・ベーコンの《磔刑》など、感染症と絵画の関係を考え続けることとなった。

以下が再始動第2作目の新作に向けての覚え書きである。

《ta・KK・ei 2021》に向けての覚え書き

・画面の外には、広大な世界が開かれていることを強く意識すること。

床、足の下面（大地 — リアル）をしっかりと意識し、上方はるか上方（天上界 — アイデア）に思いをはせること。そして目前の感覚、情動の有機性に鋭敏であること。

・トリプティックを貫く、吊るされる逆三角形 — 不安定性と下降性。

広げられる両腕…翼 — 上昇性。

垂直軸に上下両方向の運動。

最下部水平帯 — 地平 大地 実体 から浮かぶ。

貫かれる中心性。

・磔刑 受苦

受苦—歪み、ねじれ 痛み。

有機的 感覚 — 現世的な場。

感覚 触覚、触感 (haptisch)、感情、刺激 (扇情性) の写し — 表象。

身体の動き、ジェストが表象される。

描く主体である全身の動き、手ではなく腕、腰で描くこと — 画面への移し。

(アクトではなくジェスト、写しではなく移すこと)

・筆致 + 描材 / 支持体 + 色彩。(早めに 油彩へ移行)

・明瞭さから遠ざかる。臃げ アンビバレント 乱調もまた良し。